

調査係用 禁帶出

泉市文化財調査報告書第4集

長 岬 遺 跡

仙台市教育委員会文化財課

昭和60年3月

泉市教育委員会

長 岬 遺 跡

序

泉市は、仙台市のベッドタウンとして、急激な人口増をもたらした新興都市ですが、私たちの普段の生活空間の周辺には、あまり知られていない伝統的な文化や有形、無形の文化財が数多く残されております。

埋蔵文化財を例にとれば、昨年度発掘調査を実施した住吉遺跡からは、全国的に発見例が少い前期旧石器時代の石器が出土し、泉市最古の人類は3万年も前からこの地に生活していたことが明らかになりました。

本報告書で扱っている時代は、縄文時代早期から古代までですが、私ども地域の教育に携わるものにとっては、空白になっている歴史を埋める意味から、非常に大切な内容を含んでいるものと考えております。たとえば、これまで泉市では弥生土器の発見はありませんでしたし、古代の聚落跡についても宮下遺跡や鹿島遺跡の様に七北田川流域のものでした。今回の発掘調査では、新たに生きた資料が加わったという意味で、大きな成果であったと確信しております。

最後になりますが、本書を刊行するに当って、市教委の立場を尊重し、快く調査に協力して下さった泉市长崎土地区画整理組合の皆様には心から御礼を申し上げると共に、報告書作成に当って御指導を賜わった関係機関の皆様にも厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月

泉市教育委員会

教育長 賀 場 勘 三

例 言

1. 本書は、長岫遺跡の発掘調査報告書として作成したものである。
2. 発掘調査は、泉市長岫土地区画整理組合の協力を受けて泉市教育委員会が実施した。
3. 報告書作成に当って、次の方々から指導・助言をいただいた。

宮城県教育庁文化財保護課	藤沼邦彦氏・齊藤吉弘氏・加藤道夫氏・阿部恵氏・阿部博志氏・相原淳一氏・佐々木和博氏
宮城県東北歴史資料館	小井川和夫氏・岡村道雄氏
宮城県多賀城跡調査研究所	進藤秋輝氏・白鳥良一氏・後藤秀一氏
東北大文学部	須藤隆氏
東北大教養部	蟹沢聰史氏
多賀城市教育委員会	相沢清利氏
瀬峰町教育委員会	阿部正光氏
白石市福岡中学校	太田昭夫氏
4. 出土品・現地での実測図・報告書作成に用いた図版等は、泉市教育委員会が保管している。
5. 本書は、泉市教育委員会社会教育課 熊谷幹男が執筆・編集した。

調査要項

遺跡名：長岫遺跡

宮城県遺跡地名表登録番号：19032

所在地：泉市松森字長岫 4・5・6

遺跡記号：A G

調査対象面積：10,630m²

調査期間：昭和59年3月7日～9月6日

調査主体者：泉市教育委員会

調査担当者：泉市教育委員会社会教育課

調査協力者：泉市長岫土地区画整理組合

調査参加者：相沢林三郎・相沢勇・相沢貞子・相沢美佐子・石森留吉・伊東枝美・伊藤芳子・遠藤栄治・大橋悦子・小野寺庄三郎・川村農・佐藤徳右衛門・塩野富子・高橋亜貴子・高橋信子・但木吉藏・但木はな子・永野次郎・永野正・本間春美・前田芳枝・本橋憲子・横田要七

調査補助員：山形大学生 門脇耕一

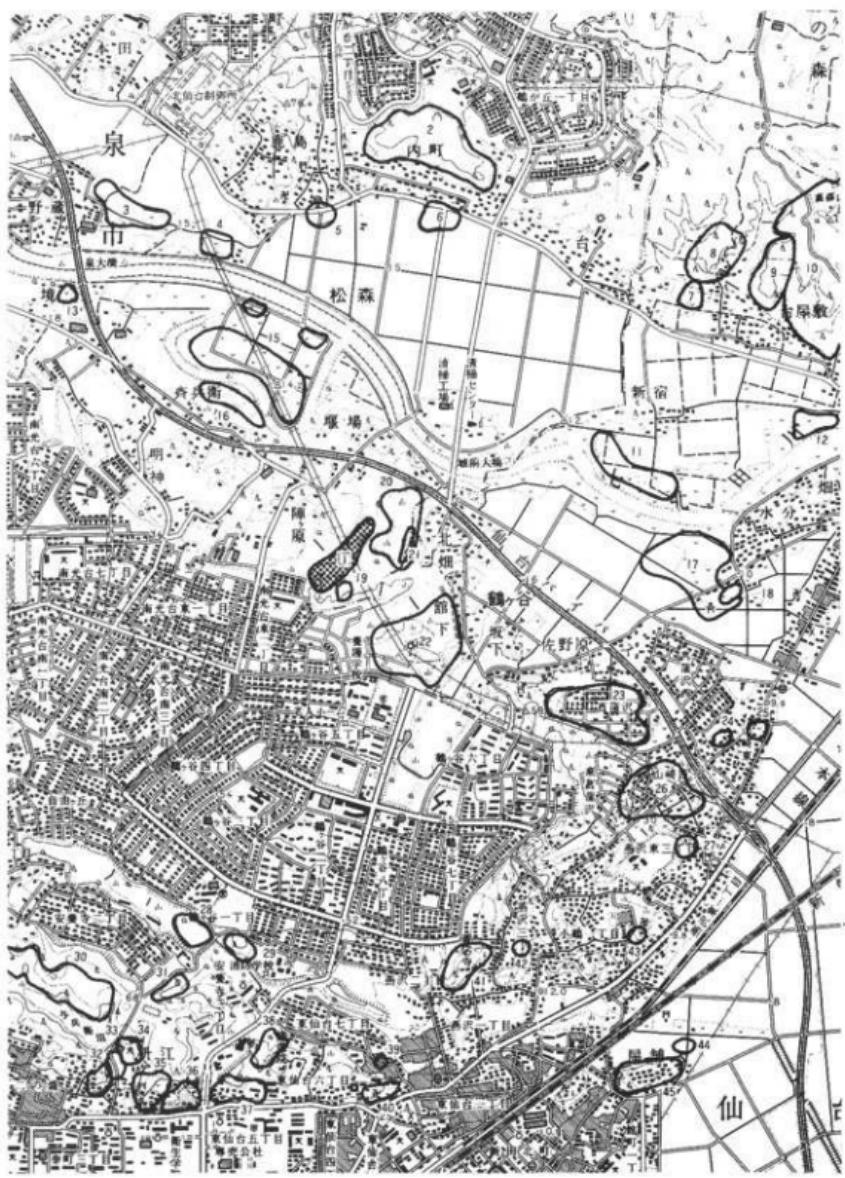
整理参加者：本間春美・伊東枝美・千葉みどり・我妻悦子

目 次

序

例言・調査要項

I. 位置と環境	2
II. 調査の方法と経過	3
1. 調査の方法	3
2. 調査にいたる経過	8
III. 発見された遺構と遺物	8
1. 基本層序	8
2. 発見された遺構と遺物	9
(1). 古代の竪穴住居跡と出土遺物	9
(2). 繩文時代の竪穴住居跡と出土遺物	19
(3). 繩文時代の竪穴遺構と出土遺物	21
(4). 焼土遺構と出土遺物	22
(5). 土塙と出土遺物	22
(6). 一括遺物が出土したピットと出土遺物	22
3. 遺構以外の出土遺物	25
(1). 繩文土器	25
(2). 弥生土器	32
(3). 古代の土器	37
(4). 剥片石器	38
(5). 磨製石器	42
(6). 局部磨製石斧	48
(7). 片歯石斧	48
(8). 両歯石器	48
(9). 碾石器	48
(10). 土製品	51
(11). 装身具	51
IV. 出土遺物の年代と遺構に関するまとめ	52
1. 出土遺物の年代	52
(1). 繩文土器の年代	52
(2). 弥生土器の年代	54
(3). 古代の土器の年代	55
(4). その他の出土遺物の年代	56
2. 遺構の年代と考察	57
(1). 古代の竪穴住居跡	57
(2). 繩文時代の竪穴住居跡	58
(3). 繩文時代の竪穴遺構	58
(4). 焼土遺構	58
(5). 土塙	58
(6). 一括遺物が出土したピット	58
V. まとめ	58
写真図版	60



1:25,000 仙台東北部

第1図 遺跡付近の地形図

I. 位置と環境

位置 長崎遺跡は、泉市松森字長崎4・5・6番地に所在する。当該地は、宮城県庁から北東へ約4.4km、泉市役所からは、南東へ約4.1kmの地点に当る。

立地 本遺跡は、七北田丘陵と呼称される小起伏丘陵上に立地している。この丘陵は、幅が約5~8km、長さ約20kmに達し、宮城町大倉付近から次第に高さを減じ、なだらかになりながら、七北田川と広瀬川の間を東走り仙台市燕沢付近まで続くものである。

遺跡は、以上述べた七北田丘陵が終焉する仙台市燕沢付近から北西へ約1.9kmの地点、北東へ向かって延びる尾根上に立地している。この尾根は、標高が約30~45m、東側は沢によって浸蝕を受け、西側は七北田川によって形成された扇状地性低地になっている。

歴史的環境 本遺跡の周辺部には、宅地開発が進んだ仙台市鶴ヶ谷地区や、泉市南光台地区等の自然改変地を除くと多数の遺跡が分布している。

最も古い時期に属する遺跡は、昭和59年度に発掘調査が実施された住吉遺跡である。段丘礫層の直上から前期旧石器が発見され、更に石刀やナイフ等、多数の後期旧石器も出土している。

縄文時代や弥生時代の遺跡も散見することができる。前記住吉遺跡からは、縄文時代早期に属する素山式土器が出土し、七北田川流域の岩切畠中遺跡からは弥生土器が採集されている。緻密な分布調査を実施すれば、自然改変地を除く丘陵からは縄文時代、七北田川流域からは弥生時代の遺跡が数多く発見されるものと推定される。

古墳時代や古代に入ると遺跡の種類、数量とも急激に増加する。高塚古墳・横穴古墳・聚落跡等の外に遺跡の南方2kmの地点には小田原瓦窯群と呼称される窯業地帯が広がっている。当瓦窯群は、多賀城や国分寺・国分尼寺への瓦の給供地として故内藤政恒博士により紹介されてきた遺跡であるが、近年では学術調査や事前調査によって、生産された瓦の年代・種類・窯の構造・工房の存在等が明らかになった。これらの外に、寺院跡あるいは官衙跡ではないかと推定される燕沢遺跡がある。仙台市教委の調査によって瓦・灰陶陶器・漆紙文書等の遺物の外に掘立柱建物跡が検出された。今後の調査によって遺跡の性格が明らかになるものと思われる。

中世の遺跡は館跡が多い。岩切城跡は、中世留守氏の居城であり多賀城から岩切にかけての知行地支配の拠点であった。昭和57年史跡指定を受け現在環境整備中である。松森城跡は、岩切城留守氏に対峙する国分氏の居城である。古城書上には、「天正年中まで居城」と記され、戦国期国分三十三ヶ郷支配の拠点であった。この外、山城には篠森城があるが大部分が形状を失っている。また留守氏の菩提寺である東光寺には、磨崖仏や板碑が密集し、中世の宗教史や文化史を研究する上で貴重な資料となっている。

本遺跡の東側には近世仙台藩の松森焰硝蔵跡がある。この遺構は3基併列してあったものであるが、現在は1基だけ現状を残しているにすぎない。元禄年間に造られ、幕末・明治初年ま

で使用されていたものである。昭和57年度の調査によって歴跡や発見孔が検出されている。

この様に本遺跡の周辺には、旧石器時代から近世にかけての貴重な歴跡が点在している。

番号	遺跡名	立地	種別	時代	備考	番号	遺跡名	立地	種別	時代	備考
1	赤堀遺跡	丘陵	墓塚	横穴・古代	仙台市教委発掘	24	千人塚古墳	丘陵	古墳	古代	
2	松森城跡	丘陵	縄文	中世		25	山崎圓頂跡	丘陵	古墳	彌文	
3	鹿島遺跡	扇状地性低地	墓塚	古代	50~55年 仙台市教委発掘	26	美沢遺跡	丘	古墳	古代	50~55年 仙台市教委発掘
4	竹之内遺跡	扇状地性低地	墓塚	古代	57~58年 仙台市教委発掘	27	吉澤遺跡	丘陵	古墳	古代	
5	清水次郎遺跡	扇状地性低地	包含地	古代		28	三島西斜面墓原	丘陵	古墳	古代	
6	武前遺跡	扇状地性低地	包含地	古代		29	安達寺中河原跡	丘陵	古墳	古代	41年 東北大学隊人発掘
7	入生沢遺跡	扇状地性低地	包含地	古代		30	牛久井源流跡	丘陵	古墳	古代	
8	入生沢横穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古代		31	安達寺配水場前跡	丘陵	古墳	古代	
9	金屋敷穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古代		32	二ノ森遺跡	丘陵	古墳	古代	
10	青切城跡	丘陵	縄文	中世	50年 仙台市教委大発掘	33	二ノ森麻跡	丘陵	古墳	古代	
11	大正沼遺跡	自然堤防	包含地	古代		34	新江遺跡	丘陵	古墳	古代	52~53~54年 仙台市教委発掘
12	新宿山遺跡	自然堤防	包含地	古代		35	神明社裏遺跡	丘陵	包含地	古代	
13	後遺跡	扇状地性低地	包含地	古代		36	神明社瓦窯跡	丘陵	二無跡	古代	55年 仙台市教委発掘
14	上河原遺跡	扇状地性低地	岩呂吉	古代		37	土手前窯跡	丘陵	古跡	古代	
15	鶴道跡	自然堤防	包含地	古代	56年 仙台市教委発掘	38	安達寺下墓原	丘陵	古墳	古代	47年 仙台市教委大発掘
16	新庄遺跡	扇状地性低地	岩呂吉	古代		39	奥内古墳	丘陵	古墳	古代	
17	若切山中遺跡	自然堤防	集落	51~52年 仙台市教委発掘		40	大通寺跡	丘陵	古墳	古代	54年 仙台市教委発掘
18	桔河跡跡	自然堤防	縄文	中世		41	善光寺源次古墳群	丘陵	古墳	古代	42年 仙台市教委発掘
19	松森城納蘭跡	丘陵	墓塚	近世	57年 仙台市教委発掘	42	比企尾古墳	丘陵	古墳	古代	
20	往吉遺跡	丘陵	集落	古石・古文・中世	50年 仙台市教委発掘	43	羅理吉塚	丘陵	古墳	古代	37年 仙台市教委発掘
21	北側城跡	丘陵	塚	不詳		44	小鶴城跡	扇状地性低地	包含地	古代	
22	皆木城跡	丘陵	縄文	中世		45	小鶴城跡	扇状地性低地	古墳	中世	
23	黄瀬沢遺跡	丘陵	包含地	縄文・古代							

II. 調査の方法と経過

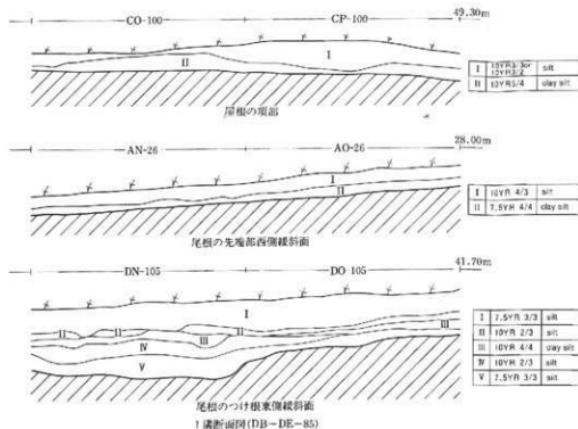
1. 調査の方法

今回の調査は、宅地開発に伴う事前調査であり、調査対象地域は宅地開発が計画される範囲に限定される。従ってこの範囲内に発掘区が設定されることから、まず調査対象地域における遺物の散布状況の把握から始めた。その結果、遺物は、当該遺跡の範囲として把握した約 300 m に及ぶ尾根上に散布していることが再確認され、尾根の頂部と斜面を対象に調査を進めるところになった。以上から第 2 図に示した通り、3 m 四方を 1 単位としてグリッド設定を行った。発地区域が東西一南北二方向にわたるため東西軸は、A・B・C・D 区に分割し、南北軸はアラビア数字の通し番号を用いて位置を表示することとした。

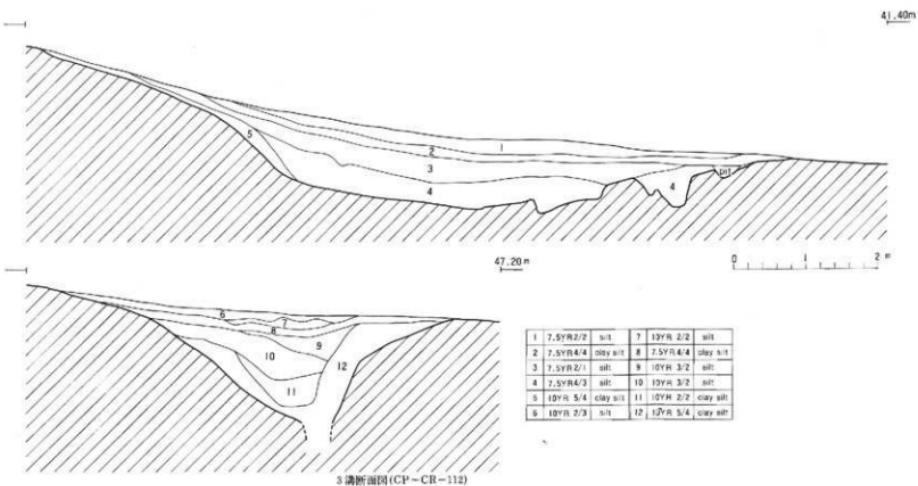
こうしてグリッド設定が終了した後には、尾根の先端、北側から南側へ掘り進める方針を立て、遺構、遺物の検出を目的に B E - 21・22 ~ B J - 21・22 区から 6 m 間隔のトレーナーを設け、表土の剥離、遺構検出を行っていった。調査の過程で遺構が検出され、あるいは遺物が多量に出土した場合には、トレーナーを拡張する方針を立てた。46~54 区では弥生土器の出土が多く、81~100 区の間には竪穴住居跡が点在、101~120 区には多量の遺物を出土する溝 2 本が検出されたためトレーナーを拡張した。



第2図 遺跡の地形図およびグリッド配置図



第2図 遺跡の地形図およびグリッド配置図



第3図 基本層序および溝の断面図

検出された遺構については、遺り方あるいは簡易遺り方を用い¹⁾の平面図を残し、溝または遺構の存在しない地区については²⁾の平板実測図を用いた。断面図は³⁾に統一し土色・土性の註記を行った。写真は、35mmモノクロームフィルム、35mmスライドフィルムを使用した。

2. 調査にいたる経過

本遺跡は、昭和55年6月1日宮城県文化財保護地区指導員(仙台市担当)森岡男氏によって発見された。氏は、仙台市鶴ヶ谷字北畠および大久保山付近の分布調査を実施中、当該地から数点の縄文土器・剥片石器・土師器等を採集したのである。泉市教育委員会では、この様な情報を得た後、同年7月15日には、泉市長嶋土地区画整理組合と合同の現地調査を実施し、森氏同様、縄文土器・剥片石器・土師器等を採集し遺跡としての認識を抱くこととなった。こうして当該地は、泉市教育委員会の手によって周知の手続きがとられ、その後泉市長嶋土地区画整理組合に連絡した。連絡を受けた泉市長嶋土地区画整理組合は、遺跡保護の立場からただちに泉市教育委員会との協議に応じ、工事施行以前に事前の発掘調査を実施することで双方合意に達した。昭和57年7月5日には、長嶋土地区画整理組合から埋蔵文化財の発掘届が提出され、これに対し宮城県教育委員会は7月29日付で、工事着手前に発掘調査を実施すべく通知している。この通知を受けて、59年2月22日には泉市教育委員会と長嶋土地区画整理組合は、①、発掘調査は泉市教育委員会社会教育課が担当する、②、調査費用は一部を除いて泉市長嶋土地区画整理組合が負担する、③、報告書作成業務については調査が終了後協議する、という内容で発掘調査委託契約書を締結した。泉市教育委員会は、以上の事務手続きが終了したので、昭和59年3月7日に発掘調査に着手し同年9月までの延110日間にわたって調査を行った。

(註)1. 基本層序の項を参照せよ。

(註)2. 森氏の分布調査結果は、「北畠遺跡に関する踏査中間報告」としてまとめられている。

III. 発見された遺構と遺物

1. 基本層序(第3図)

本遺跡の基本層序は、遺跡が東西約300m・南北約150mの広範囲にわたるため、自然地形の相違によって異なる様相を呈している。尾根の頂部および急斜面には、明らかな火山性の堆積層は認められず、風化あるいは流出したものと考えられる。これに対し尾根の下端部では、二次的堆積層も認められ、層序も多くなっている。

(1). 尾根の頂部 I～II層から成る。I層は、木根および草木の影響を多分に受けた表土である。暗褐色(10Y R 5%)および黒褐色(10Y R 5%)のシルトである。II層は、にぶい黄褐色(10Y R 5%)粘土質シルトで、地表面の漸移層的性格を呈す。

(2). 尾根の先端部西側緩斜面 尾根の頂部とは、土色・土性とともに異なる。I層は、尾根の頂部同様、木根および草木の影響を多分に受けた表土であり、厚さは20cm弱である。にぶい黄褐色

(10Y R 5%)シルトである。II層は、褐色(7.5Y R 5%)粘土質シルトで標高が下がるに従い消滅する。

(3) 尾根のつけ根東側緩斜面 地山以上の層は5枚に分けられた。I層は、暗褐色(7.5Y R 5%)シルトであるが、2次の堆積層も含むものと推定される。最も標高の低い地区では40~50cmの厚さになっている。II層は、黒褐色(10Y R 5%)シルトである。西側の斜面付近でとされるが、ほぼ全域で認められる。III層は、褐色(10Y R 5%)粘土質シルトであり、II層同様の分布状況を呈す。尾根先端部西側緩斜面のII層に対応する。II・III層の厚さは近似し10~15cmが一般的である。IV層は、II・III層よりは厚い黒褐色(10Y R 5%)シルトでありII層に類似する。V層は、地山直上の層で暗褐色(7.5Y R 5%)シルトから成るが、地山直上の層であるため疊を含んでいる。この付近の全域に分布している。

(註) 発掘区域から何本かの溝が検出された。この溝は、幅・深さ・断面形等に共通性がないものである。性格については、十分な認識を抱くことができなかったが規則性を欠くという点を考慮すれば、人為的遺構とは考えられず自然地形と判断することが妥当であろう。確かに1溝は尾根と尾根の間に生じた沢とも考えられるし、他のものも底面がかなり知れなく深い地点が存在したり、地すべり等によって生じた自然地形と思われる。これらの溝が生じた年代は、地盤上の上層に灰白色火山灰層が認められることから古代以前であることは疑いない。

2. 発見された遺構と遺物

本遺跡からは、古代の竪穴住居跡5軒、縄文時代の竪穴住居跡1軒、縄文時代の竪穴遺構1基、焼土遺構15基、土塙7基、一括遺物が出土したビット2基等が検出された。

(1). 古代の竪穴住居跡と出土遺物

第1住居跡(第4図)

遺構の確認 C F・C G・C H-53・54[×]の地山面で確認された。点線内が堆積土の残存していた範囲内である。

平面形・規模 平面形は、北~西側を失っているが、残存部から判断すると方形を基調としたものである。規模は、残存部が少く不明である。

床面 地山面を床面とする。北側へ緩やかに傾斜するが起伏のない平坦な面である。

周溝 長さ4.4mにわたって検出された。最大幅が26cmで、床面からの深さは、最深部分で9cmと浅い。断面形はU字及びV字形である。

焼面 ビット1・ビット2の中間位置に50×56cmの焼面が検出された。

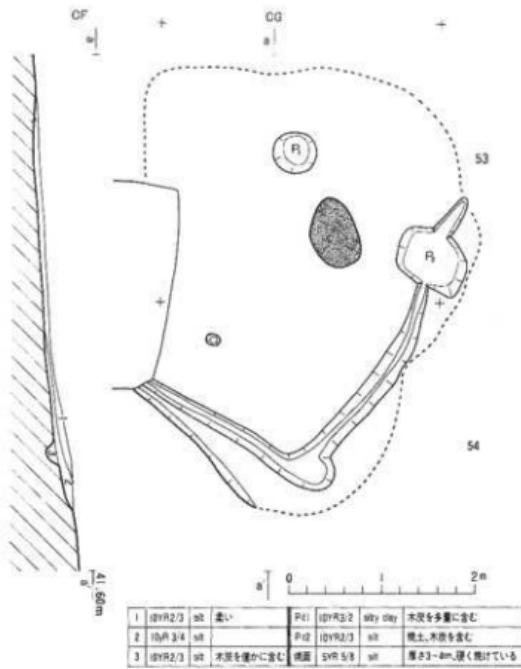
柱穴 柱痕を作ったビットが検出されず柱穴については不明である。

伴出遺物(第5図) ビット1、ビット2、埋土1・2層から土師器壺・甕、赤燒土器壺、土師器あるいは赤燒土器とも区別がつかない壺が出土した。

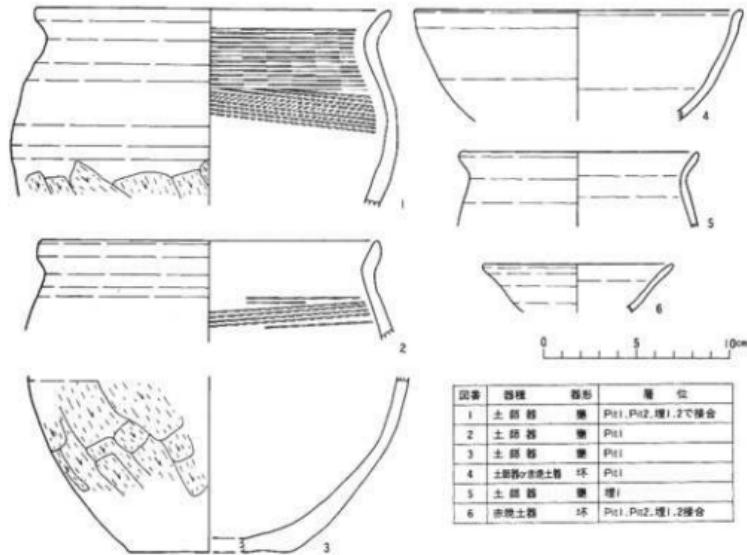
これらのうちビット1・ビット2出土遺物は、両ビットが床面から検出され遺構に伴うもの

と考えられることから、年代決定資料になり得る。また、埋土1・2層出土遺物も埋上が浅くほとんど床面出土のものと同様であることから、年代決定資料として扱うことが可能である。

1・2・3・5は、土師器蓋であり、製作にロクロが使用されたものである。外面はロクロ調整のもの(2.5)とロクロ調整後ケズりが加えられるもの(1.3)がある。内面は、回転ハケメのもの(1.2)とロクロ調続のもの(5)。磨滅が著しく不明のもの(3)に分かれる。6は赤焼土器壺で、4は土師器あるいは赤焼土器壺であるが、



第4図 第1住居跡



第5図 第1住居跡出土遺物

器形的には土師器壺に類似する。4・6とも再調整は加えられていない。

第2住居跡(第6図)

遺構の確認 C T + D A - 86・87区の地山面で確認された。

平面形・規模 平面形は、隅丸方形である。規模は、長軸が3.2m、短軸が2.9mを測る。

壁 地山を壁としている。壁の立ち上がりは、全体的に急角度である。高さは、西壁が最も高く60cmを越える部分もある。

床面 地山面を床としている。地山に礫を含むためいく分凹凸が認められる。東側へ傾斜している。

カマド 北壁に付設されている。幅30~60cmの煙道を伴い、床面との間に10~15cm程度の段差を伴う。壁と煙道のつけ根に焼けた痕跡が認められる。

伴出遺物(第8図) 埋土1・2・3層、煙道内から土師器甕、須恵器甕、台付壺、縄文土器片が出土した。これらの内、

煙道内出土遺物は年代決定

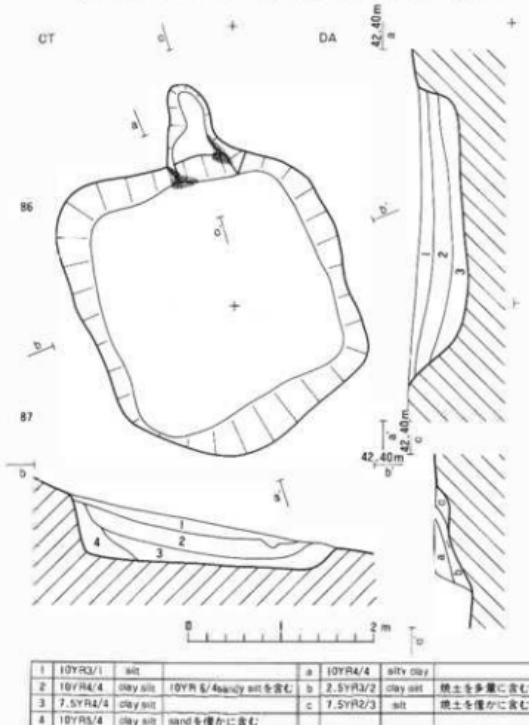
資料である。

1は、須恵器甕の体部破

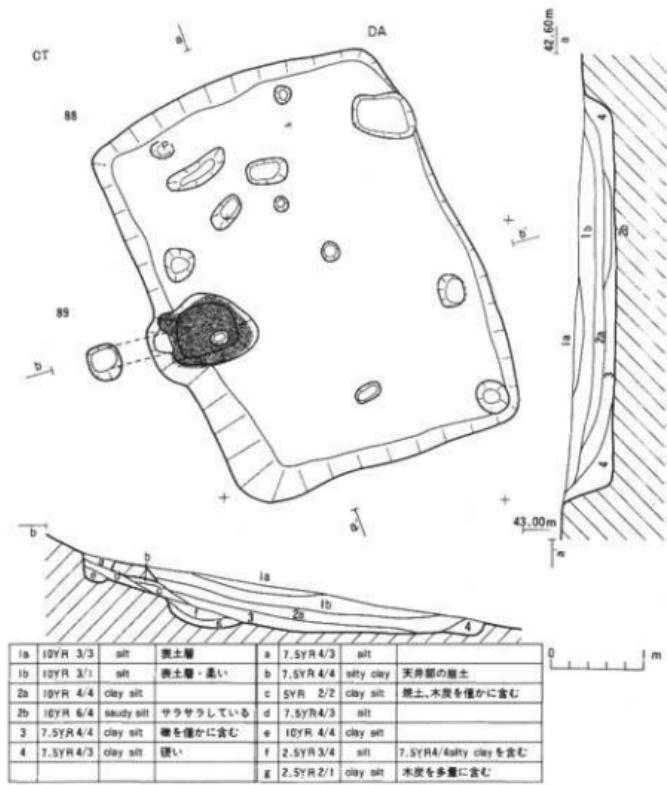
片である。外面にタタキが

施されている。2は、須恵器

台付壺の底部破片である。



第6図 第2住居跡



第7図 第3住居跡



第8図 第2・3住居跡出土遺物

第3住居跡(第7図)

遺構の確認 C T · D A · D B - 88 · 89区の地山面で確認された。

平面形・規模 平面形は、隅丸方形である。規模は、長軸が4.5m、短軸が3.4mに達する。

壁 地山が壁となっている。立ち上りは、全体的に急角度であり、高さは、12~55cm、標高の高い西側が高くなっている。

柱穴 床面から12個のビットが検出された。これらのビットには、柱痕を作うものもなく、また配置上の規則性を欠くため柱穴と考えられるものは存在しない。

床面 地山面を床面とする。わずかに凹凸が認められる。標高の低い南東側へ緩やかに傾斜している。

カマド 煙出しビット、煙道、燃焼部から成る。煙出しビットは、直径36cm、深さ20cm強に達する。煙道は、長さ70cm、幅20cmで天井部が崩落せず残っていたためトンネル状を呈す。燃焼部は、80×90cm、床面からの深さが10cm前後の掘り方で形成され、中央より左側寄りに小ビットを作う。

伴出遺物(第8図) 墓土1·2·3層から赤焼土器壺、土師器壺・甕の破片、煙道内から土師器甕の破片、ビット1から須恵器壺が出土した。これらのうち、ビット1出土の須恵器壺が年代決定資料である。

3は、須恵器の壺である。製作にロクロを使用した後、体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。底部下端に丸味を帯び内寄しながら立ち上るものである。4は、土師器壺である。製作にロクロを使用したもので、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りである。

第4住居跡(第9図)

遺構の確認 C P · C Q · C R · C S - 92 · 93 · 94 · 95区の地山面で確認された。

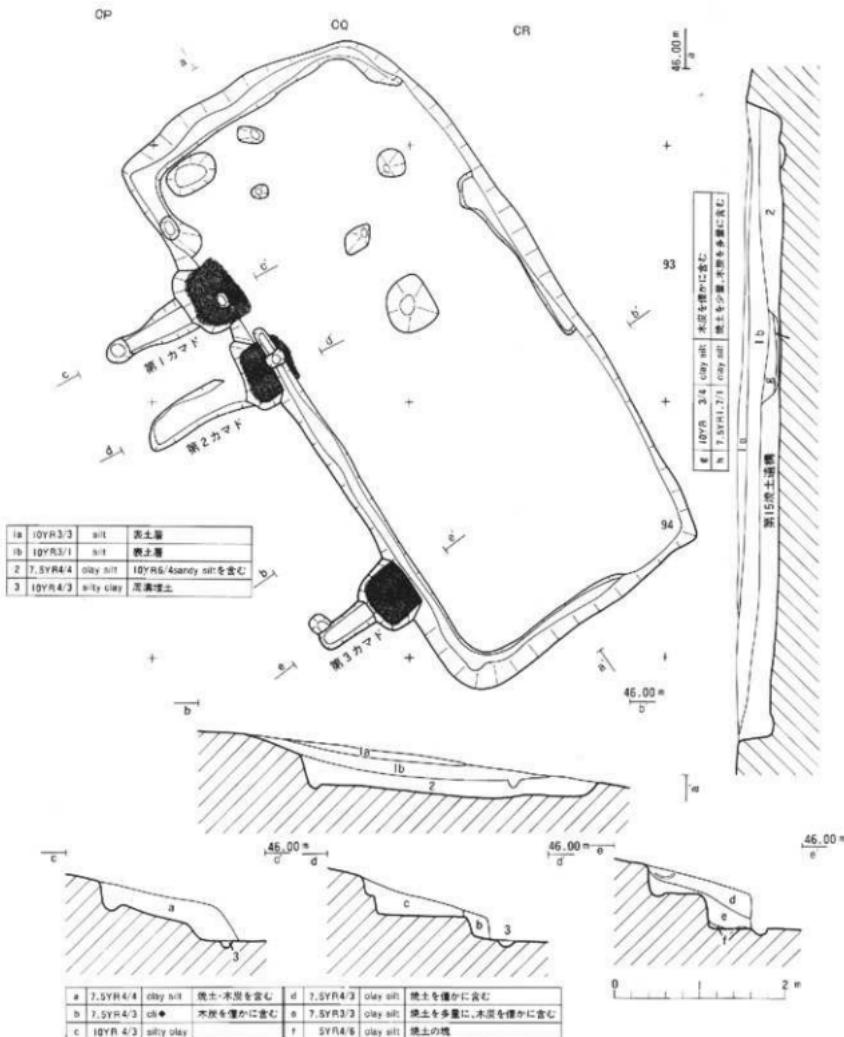
平面形・規模 平面形は、隅丸方形である。規模は、長軸が7.5m、短軸が3.5mで本遺跡では最大の豎穴住居跡である。

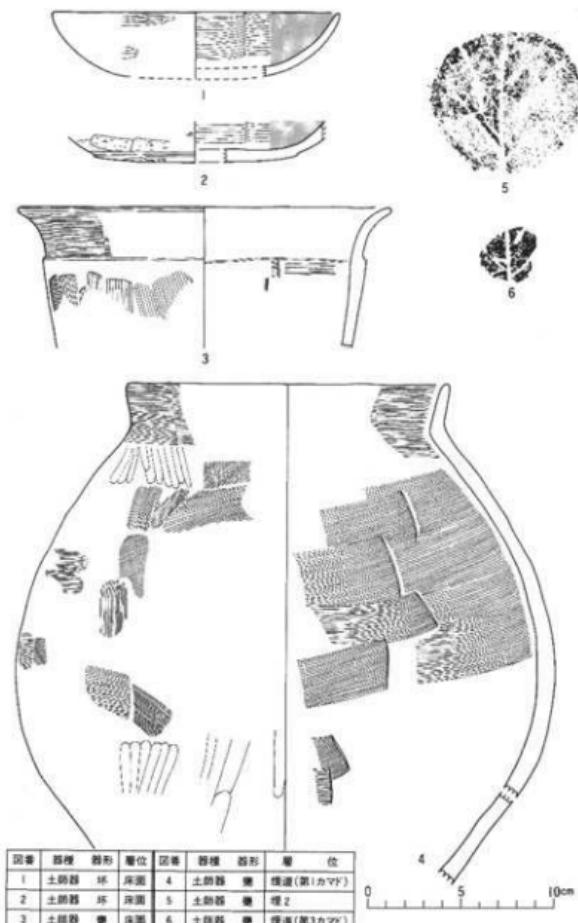
壁 地山面を壁とする。高さは、10~55cm、標高の高い西側が高く、東側へ移るに従って低くなる。立ち上りは、全体的に急角度である。

床面 地山面を床面となす。ほぼ平坦であるが、緩やかに東側へ傾斜している。

周溝 虹添いに検出された。全周しておらず、南東コーナーと東壁の北端ではとぎれる。幅は15~30cm、深さは3~8cmと浅い。断面形は、深い部分ではV字形、浅い部分ではU字形を呈す。

柱穴 床面から6個のビットが検出された。これらには柱痕がなく、また配置に規則性が認められず柱穴と判断されるものは存在しない。





第10図 第4住居跡出土遺物

カマド 西壁に3基付設されている。北側から第1・2・3カマドと呼称する。燃焼部底面が周溝によって切られていない第1カマドが本住居跡廃絶時まで使用されていたものと考えられる。第2・3カマドは、燃焼部が周溝によって切られ、第1カマドより古いものであるか、相手の新旧関係は不明である。

第1カマドは、煙出しピット、煙道、燃焼部からなる。煙出しピットは、直徑が3cm弱、深さ30cm強である。煙道は、長さ80cm、幅20~40cm、深さは20cmを測る。燃焼部は、壁にくい

込んでいるのが特徴で、煙道部下端と燃焼部底面との間には20cm程度の段差が認められる。燃焼部の底面は60×80cmの範囲が焼けて赤変し、中央部には小ビットが検出された。

第2カマドは、煙道と燃焼部から成る。煙道は、長さ120cm、幅35~40cm、深さ25~30cmである。燃焼部は、第1カマド同様壁にくい込み煙道の下端と燃焼部の底面との間に20~30cmの段差がある。燃焼部は周溝によって切られているが、中央には第1カマド同様、小ビットを伴う。

第3カマドも、煙道と燃焼部から成る。煙道は、長さ70cm弱、幅30cm、深さ20~30cmである。燃焼部は、第1・2カマド同様に壁にくい込んで築かれている。また、第1・2カマド同様に煙道の下端と燃焼部の底面との間には段差が認められるが、40cmと最も大きい。

伴出遺物(第10図) 床面、埋土1・2層、煙道から土師器坏・甕が出土した。床面・煙道出土遺物が年代決定資料である。

1・2は、製作にロクロが使用されない土師器坏で、底部形態が丸底風のものである。外面の調整技法は、1が、磨滅のため明瞭ではないがヘラミガキ、2はヘラケズリである。内面にはいずれもヘラミガキ後、黒色処理が施されている。2の体部下端には段が認められる。3・4は、土師器甕である。坏同様製作にロクロが使用されていない。3は、口縁部と体部との間に軽い段を伴う。外面は、口縁部がヨコナデ、体部にはハケメが施されている。内面はヘラナデである。長胴型のものと推定される。4は、体部が外方へ向かって膨らみ球状を呈するものである。外面は、口縁部がヨコナデ、体部にヘラミガキあるいはナデが施され、内面は、口縁部がヨコナデである外、ヘラナデが認められる。5・6は、土師器甕の底部破片で木葉痕を伴う。

第5住居区(第11図)

遺構の確認 C P・C Q・C R-97・98・99の地山面で確認された。

平面形・規模 平面形は、隅丸方形である。規模は、長軸が5.4m、短軸が2.6mを測る。

壁 地山を壁としている。高さは、33~67cm、穂高の高い西側が高く、立ち上がりは、全体的に急角度である。

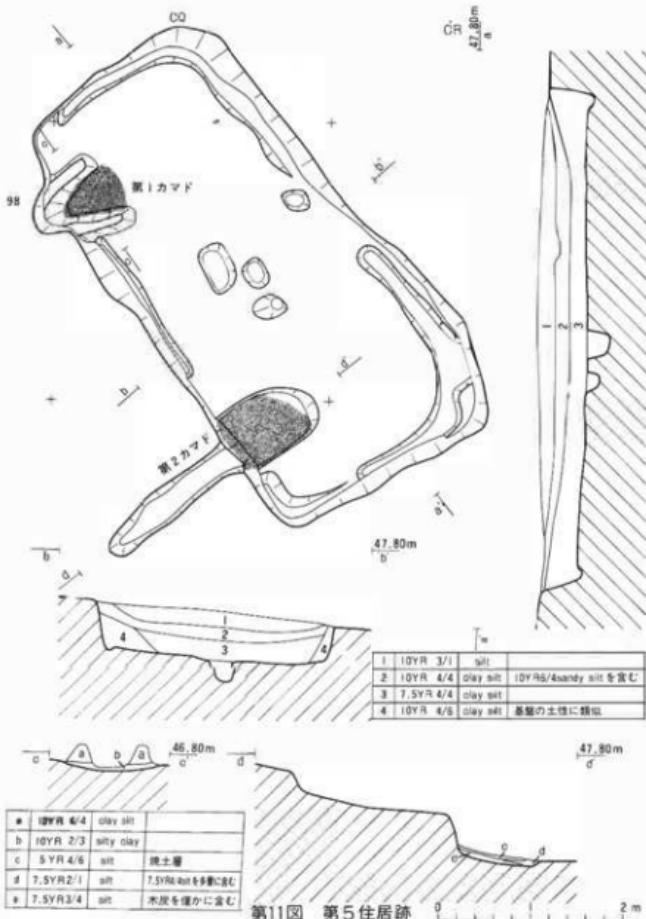
床面 地上面を床としている。東側へ緩やかに傾斜する。僅かに凹凸が認められるが、全体的には平坦である。

周溝 壁添いに検出された。とぎれる部分もあるが、全長9.8mに達する。幅は10~22cm、深さは最深部で10cm強、断面はU字形を呈す。

柱穴 床面から4個のビットが検出されたが、これらには柱痕が認められず、また配置に規則性を欠くため柱穴とは考えられない。

カマド 西壁に2基付設されている。北側のものを第1カマド、南側のものを第2カマドと呼称する。

第1カマドは、側壁と燃焼部から構成されている。側壁は、床面を一度掘り込んだ後、粘土



第11図 第5住居跡

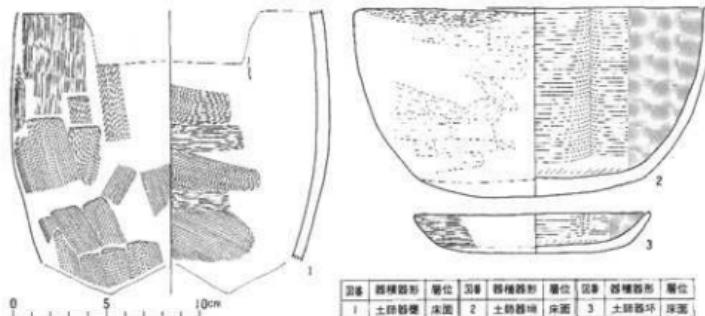
質シルトを積み上げて構築している。側壁に囲まれた部分が燃焼部であるが、 $50 \times 70\text{cm}$ の範囲にわたって加熱のため赤変している。

第2カマドは、煙道と燃焼部から成る。煙道は、長さ1.7m、幅30cm前後、深さ8~22cmである。燃焼部は、 $74 \times 90\text{cm}$ 、深さ2~8cmと浅いものであるが、明らかに掘りくぼめたものである。第1カマド燃焼部同様、焼けて赤変している。煙道の下端と燃焼部の底面との間には、40cm強の段差を伴っている。第1カマドは側壁を作うことから住居廃絶時まで使用されていたものである。

伴出遺物(第12図) 埋土1・2・3層および床面から土師器壺・甕・塊等が出土した。これらのうち、床面出土遺物は、住居廃絶時まで使用されていたと考えられ、年代決定資料である。

1・2・3とも製作にロクロが使用されていないものである。1は、土師器甕の体部破片であり、外側はハケメ、内側にはナテが認められる。2は、土師器塊である。底部は丸底風で体部との間に棱線がある。底部から内窓しながら立ち上り、口縁部付近では直立する。外側の調整技法は、ヘラケズリが主体を占めるが、口縁部付近には一部ヘラミガキ痕が認められる。3は、土師器壺である。底部は平底に近いものである。内窓ぎみに外傾しながら立ち上る。体部外側の調整技法は、磨滅のため明らかでないが、ヨコナデであろうか。2・3とも内側は、ヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

(註) 第2～5住居跡埋土2～3層は、県内各地から発見されている「灰白色火山灰層」である。本遺跡の火山灰層は、筆者も発掘に携わった志波姫町宇南遺跡や御前堂遺跡のものに比べ黄色味を帯びてくろん枯性の強いものであったが、一見して同様の火山灰層であると識別することが可能であった。この火山灰層の降下年代については、庄子貞雄・山田一郎は、約800A.Dよりも新しいとし(1979:『宮城県多賀城跡調査研究所年報』、宮城県多賀城跡調査研究所)、白鳥良一は、10世紀前半頃(1980:『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所)という見解を述べている。



第12図 第5住居跡出土遺物

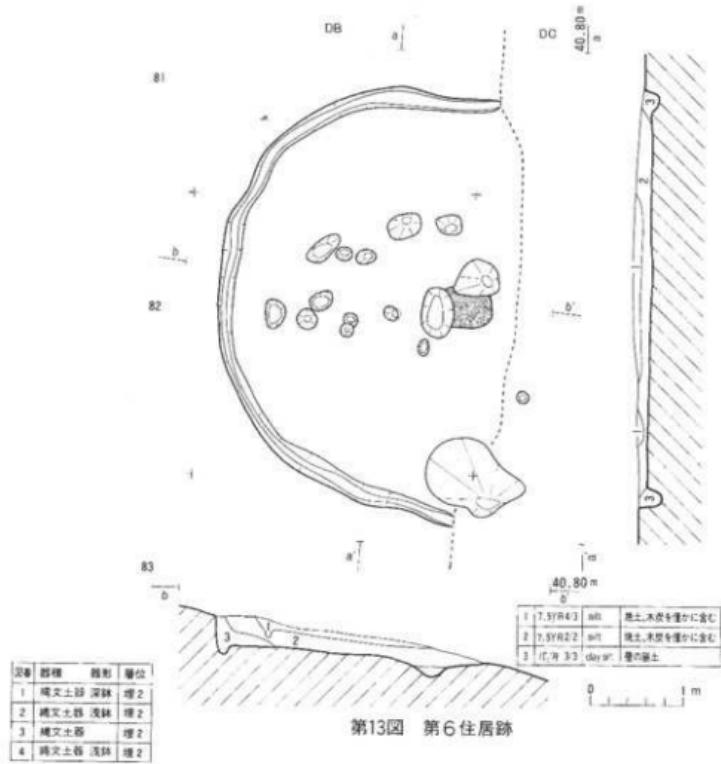
(2). 繩文時代の堅穴住居跡と出土遺物

第6住居跡(第13図)

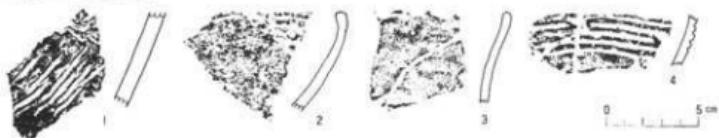
遺構の確認 D B・D C-81・82区の地山面で確認された。東半部は残存していない。

平面形・規模 残存部分の平面形は、円形を基調としたものである。残存部分の規模は、南北軸で4.5m程度である。

壁 地山を壁とする。立ち上りは、全体的に急角度である。高さは、西側が最も高く、床面から40cmに達する部分が認められる。東側へいくに従い、自然に消滅する。



第13図 第6住居跡



第14図 第6住居跡出土遺物

床 地山面が床である。平坦な面であるが東側へ傾斜している。木根の影響と考えられる小ピットが多数認められる。

周溝 南-西-北側の壁添いから検出され全長8.1mに達する。幅は10~22cmの間で、床面からの深さは、最も深い地点で18cmを測る。断面は、U字形を呈す。

焼面 中央部から2個のピットによって切られているが約40×40cmの焼面が検出された。

伴出遺物(第14図) 埋土1・2層から縄文土器が出土した。これらのうち、埋土2層出土遺物

は、住居廃絶後流入したものであり、年代決定の参考になるものである。

1は、深鉢形土器の底部に近い体部破片であり、条線文が施されている。2は、浅鉢形土器の口縁部破片である。口唇部は内窪し、外面に一本沈線を伴う。器面が粗れているが無文のものであろう。3の器形は不明である。口縁部は無文帯で波状を呈す。4は、浅鉢の口縁部に近い破片である。数条の平行沈線が描かれたΩ字状に彫去される部分を伴う。

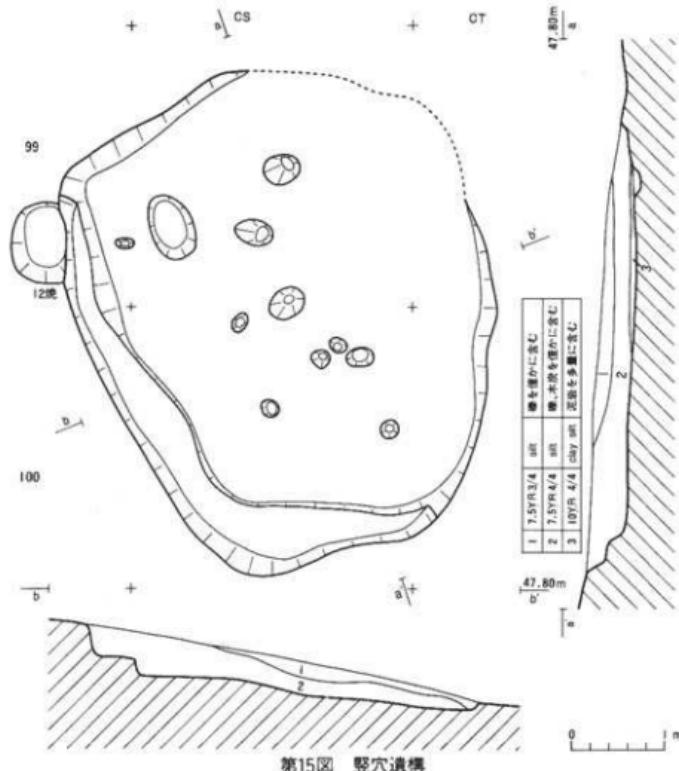
(3). 縄文時代の竪穴遺構と出土遺物

竪穴遺構(第15図)

遺構の確認 C R · C S · C T - 99 · 100区の地山面で確認された。

平面形・規模 平面形は、一部壁を欠くが不正方形といえる。規模は、長軸5.3m、短軸4.3mである。

壁 地山を壁とする。高さは、最も高い所で33cm、立ち上りは、全体的に緩やかである。



第15図 竪穴遺構

ピット 床面から11個のピットが検出された。大きさ、形態、深さ、埋土に統一性がない。

重複 第12焼土遺構と重複し、壁の一部および埋土が切られている。

伴出遺物 埋土1・2層から縄文土器が38点、円盤状土製品1点が出土している。いずれも磨滅が著しく図示作業は省略したが、すべて胎土に多量の纖維を含むものである。地文は、内外面に条痕文が施されるもの、内面に条痕文が施されるもの、外面が縄文あるいは撚糸文のもの等である。

(4). 焼土遺構と出土遺物

遺構の概要(第16図・第17図1) 焼土遺構は、合計15基検出された。これらは発掘区域のはば全域に分布している。遺構確認面は、大部分が地表面であるが、第1焼土遺構は、基本層子第II層から検出され、第15焼土遺構は、第4住居跡の埋土2層から掘り込まれている。平面形は、橢円形・不整円形・円形・方形のもの等があり、平面積は、第7焼土遺構が5.75m²と大規模である外、他は0.41~1.48m²と平均化している。壁の立ち上りは、緩やかなものと急なもの等様々であり、深さは10~26cmの間である。底面には2~5cm程度の木炭を多量に含む層が堆積し焼けて変化しているものが多い。

伴出遺物(第18図) 第1焼土遺構から土師器台付壺・甕、第5・13焼土遺構からは縄文土器が出土した。縄文土器については少量であり図示作業は省略した。

1は、土師器甕であるが、製作にロクロが使用されたものである。体部にヘラケズリがなされている。2は、土師器の台付壺である。1同様製作にロクロが使用されている。

(5). 土塙と出土遺物

遺構の概要(第17図) 土塙は、合計7基検出された。発掘区域のはば全域に分布している。遺構確認面は、すべて地表面である。平面形は、円形・不整円形・不整形で、平面積は0.60~1.88m²の範囲である。深さは10~48cm、壁の立ち上りは、全体的に急角度である。

伴出遺物(第18図) 第2・6・7土塙から縄文土器が出土した。

3・5は胎土に纖維を含むもので、3の地文は縄文(L R)、5は内外面に条痕文が施される。

4は渦巻文が描かれている。

(6). 一括遺物が出土したピットと出土遺物

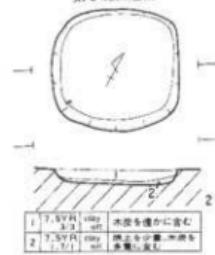
遺構の概要(第17図6・9) 一括遺物が出土したピットは2基検出された。ピット1は、C M-103区の地表面で検出された。第5土塙と重複するが、新旧関係は明らかでない。規模は、30×30cm程度、深さは5cm程度である。ピット2は、C N・C O-112・13区、3清埋土3層上面で検出された。規模は、約80×70cm、深さは15cm前後である。

伴出遺物(第19図) ピット1からは縄文土器の完成品1点、ピット2からは、弥生土器の一括品3点が出土した。

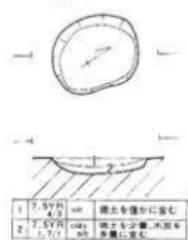
第1焼土遺構 第2焼土遺構



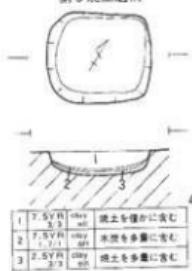
第3焼土遺構



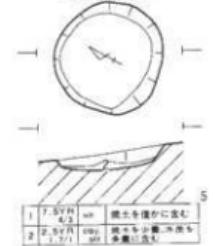
第4焼土遺構



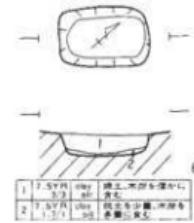
第5焼土遺構



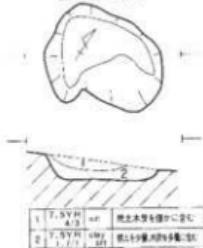
第6焼土遺構



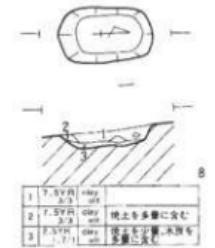
第8焼土遺構



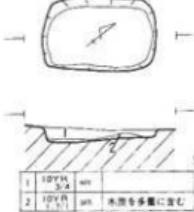
第9焼土遺構



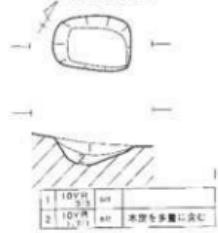
第10焼土遺構



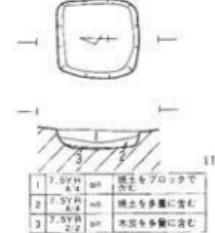
第11焼土遺構



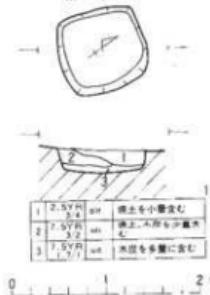
第12焼土遺構



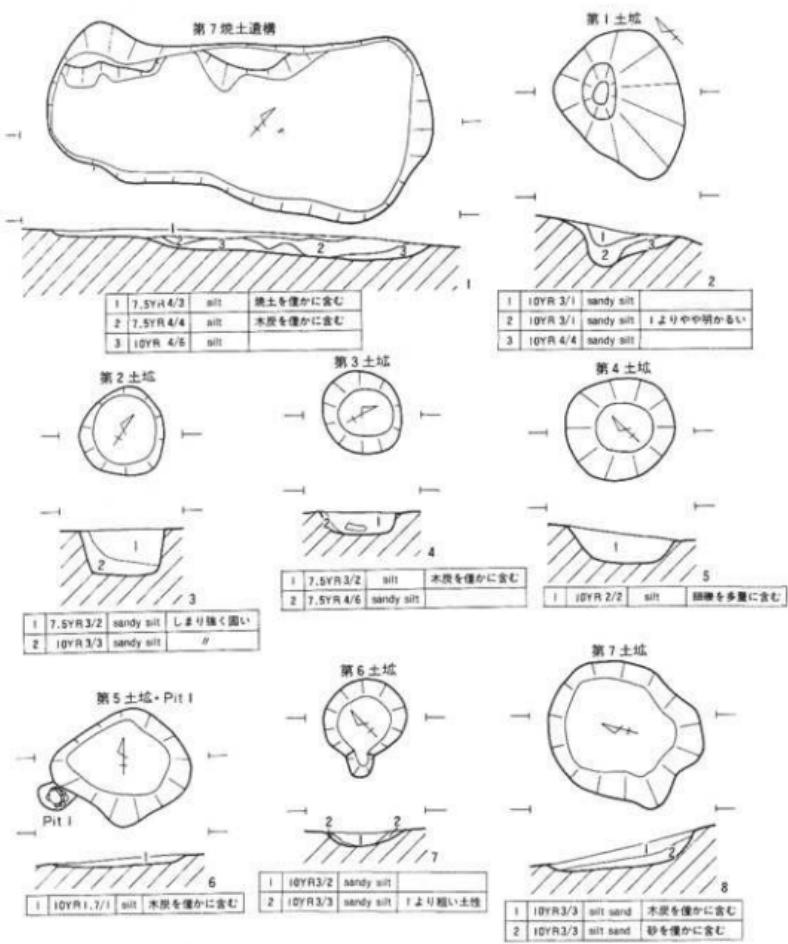
第13焼土遺構



第14焼土遺構



第16図 焼土遺構

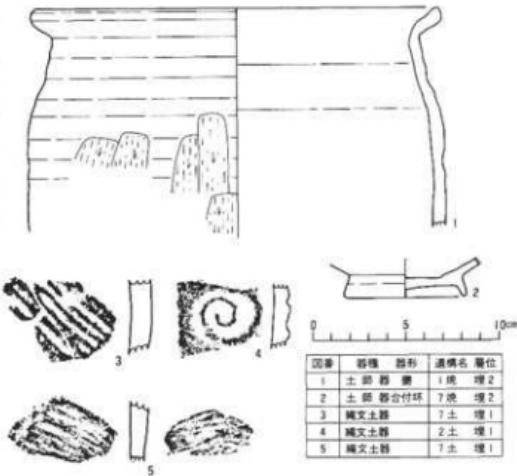


第17図 焼土遺構・土壙・ピット1・2

1は、縄文土器である。口唇部には多数の刻目と4個のB字状突起を有す。口縁部には、5本の平行沈線が描かれ、8ヶ所でΩ字状に彫去され、工字状の文様を呈す。最大径が体部上端にある深鉢形土器である。体部外面には、縄文(I.R)が施され、下端には条線文が認められる。内面の口唇部付近には、一本沈線が描か

遺構名	平面形	規模(cm)	高さ(cm)	立ち上り	平底壁(?)	遺構名	平面形	規模(cm)	高さ(cm)	立ち上り	平底壁(?)
第1施 構 円 形	146×96	10	縫やか	0.98(複数)		第12施 方 形	81×56	23	縫やか	0.41	
第2施 構 円 形	130.7×80	10	縫やか	0.78(複数)		第13施 方 形	90×83	20	急	0.67	
第3施 方 形	134×130	16	やや急	1.48		第14施 方 形	95×88	24	急	0.72	
第4施 不整円形	94×76	16	やや急	0.60		第15施 不 整	不明	不明	浅	急	不明
第5施 方 形	119×95	26	急	0.96		第1 土 坩	不整円形	160×140	40	縫やか	1.56
第6施 円 形	129×110	16	やや急	1.06		第2 土 坩	円 形	92×90	48	急	0.64
第7施 方 形	148×160	24	縫やか	5.75		第3 土 坩	円 形	88×83	23	やや急	0.57
第8施 方 形	98×64	22	急	0.56		第4 土 坩	円 形	118×108	28	やや急	1.00
第9施 不整円形	120×110	22	やや急	1.04		第5 土 坩	不整円形	120×110	10	縫やか	1.24
第10施 方 形	109×60	18	やや急	0.51		第6 土 坩	円 形	90×89	14	縫やか	0.60
第11施 方 形	122×76	16	急	0.84		第7 土 坩	不整円形	155×140	24	縫やか	1.88

れている。2～4は、弥生土器である。2～4は、体部下端および底部しか残存せず器形は定かでない。2の体部には、繩文(R.L)が施されるが、3・4は磨滅が著しく地文は明らかでない。いずれの底部にも編物痕を作り。



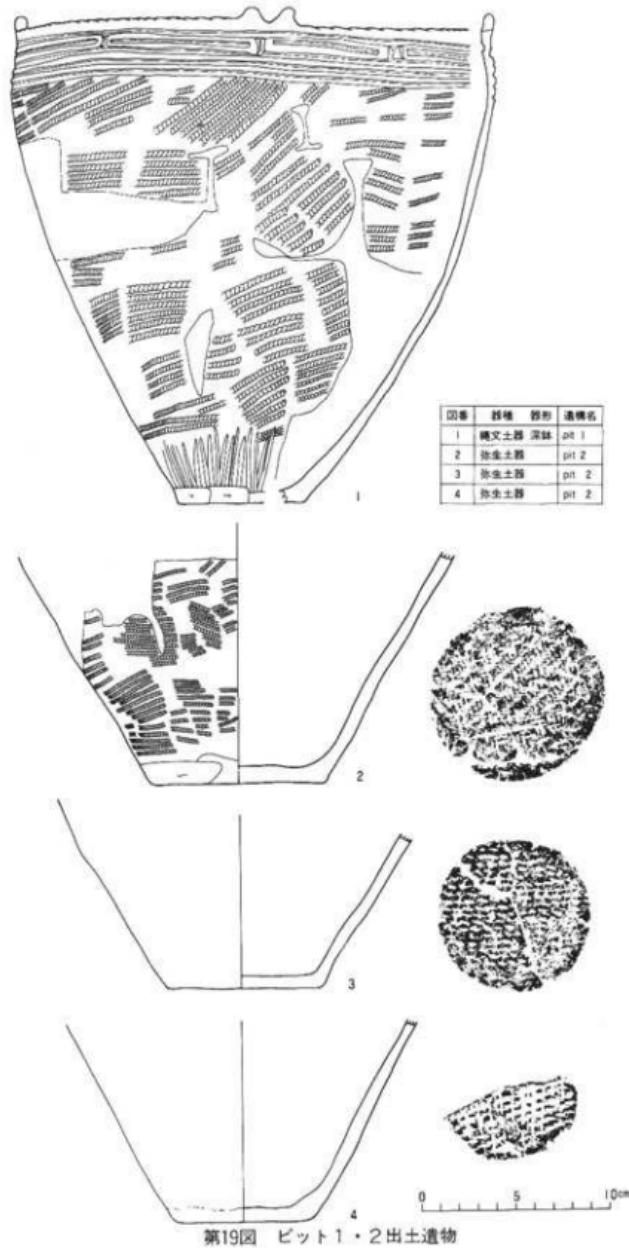
第18図 焼土遺構・土塙出土遺物

3. 遺構以外の出土遺物

遺構以外からは、縄文土器・弥生土器・古代の石器・剝片石器・局部磨製石斧・片歯石斧・両齒研石器・礫石器・土製品・装身具が出土した。この頃では、縄文土器・弥生土器・剝片石器・磨製石器について分類的記述を行い、他のものは項目ごとに記述した。

(1). 縄文土器 縄文土器は、第6住居跡・竪穴遺構・土塙・焼土遺構・ピット1等の外に、基本層序I～III層及び溝の堆積土中から、平箱5箱相当量が出土した。これらのうち、遺構に伴うものは、第6住居跡・ピット1出土遺物のみで、また、完形品は2点しか出土していないため、次章で編年的位置を考えてみたい。

第1類 (第21図1～11) 脂土に纖維を含み、条痕文が施されるものである。これらのうち、1



第19図 ピット1・2出土遺物

～5は、内外面に条痕文が認められる。1は口縁部破片であり、口唇部に刻目を有す。2は外面に降帶を伴う。3は内面が磨滅しているため拓影図を省略したが、内面にも条痕文が施されている。5は緩やかに弯曲し底部に近い破片と推定される。第18図5も内外面に条痕文が施されるものである。6～11は内面に条痕文が施されるもので、外面は、無文のもの(6)、縄文のもの(7・9～11)、撚糸文のもの(8)に分かれる。地文は、8が撚糸文(L)、9・11が縄文(L R)、7・10は器面が粗れているため不明である。外面に縄文を有し、内面に条痕文が施される土器は、出土遺物中最も多い。

第2類（第20図14）胎土に纖維を含み、外面に縄文が施されるものである。他にも少量出土したが、器面の粗雑なものが多く、1点のみの収録に留めた。口縁部に近い破片であり、大きく外反する。地文は、縄文(L R)である。

第3類（第20図15・16）胎土に比較的少量の纖維を含み、外面に半截竹管による刻目と斜位の撚糸文が描かれるものである。15・16の2点出土し、いずれも口縁部破片で同一個体のものである。

第4類（第20図12・13）細かい刻目をつけた粘土紐が貼り付けられるものである。他に数点出土した。13は口縁部破片であり、X字型に粘土紐が貼り付けられている。地文は、12・13とも縄文(L R)である。

第5類（第20図17～19・22）半截竹管により沈線が描かれるものである。17は鋸歯型の文様に円文が付加されている。18は口縁部破片で、口唇部付近まで文様が及ぶ。19・22は横縦位の沈線文が描かれる。地文は、19が縄文、22が撚糸文であるが、原体は不明である。

第6類（第20図20・21）地文が網目状撚糸文のものである。他に数点出土した。

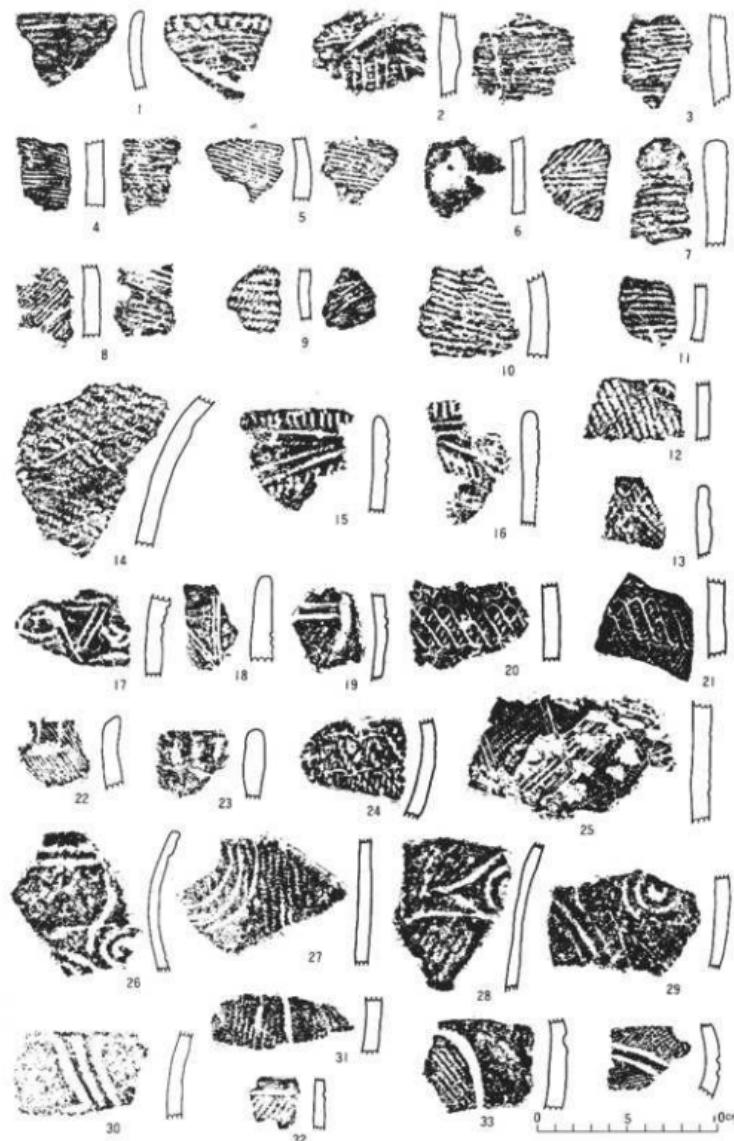
第7類（第20図24）地文が撚糸文のものである。1点出土したにすぎない。地文は、撚糸文(R)である。

第8類（第20図23）半截竹管により爪形文が描かれるものである。23は口縁部破片であり、1点出土したにすぎない。

第9類（第20図25）二～五条の細い沈線でX字型の文様が描かれるものである。1点出土したにすぎない。地文は、縄文(L R)である。

第10類（第20図26～30）幅の広い沈線で渦巻文が描かれるものである。26～30は、器面が粗雑なものであるが同一個体である。26は口縁部破片で、大きく外反する。30を除き渦巻文が描かれ、26・28・29にはフ字状の刺を伴う。地文は不明なものもあるが、縄文(L R)である。

第11類（第20図31～34・第21図1）太い沈線によって弧状の文様が描かれ磨消縄文を伴うものである。いずれも小破片のため、文様構成は明らかでないが、第20図33・34には楕円文が描かれ、第20図31・32、第21図1は、横位及び縦位の楕円文と判断される。地文は、第20図31、第21図1が縄文(L R)、第20図32～34は縄文(R L)である。



第20図 縄文土器(1)

第12類（図22図2～5）頸部に横位の平行沈線を伴い、体部には数本の弧状沈線が描かれるものである。2～5は同一個体のもので口縁部が外反し、体部上端が幾分外側へ張り出す。深鉢形土器と判断される。口縁部には、円孔を伴う。地文は、縄文（LR）である。

第13類（第21図6）浮き彫り的手法によつて曲線的文様が描かれるものである。1点のみ出土した。小破片であるが浅鉢形土器と推定される。内外面にミガキが施されている。

第14類（第21図7～9、25～27・29）口縁部が平縁で口唇部に三～五条の平行沈線帯が描かれるものである。29を除き深鉢形土器と推定される。7～9・25は体部上端が外側へ張り出すものである。25は沈線帯がΩ字状に彫去される。27は口唇部に刻目、8・25・26は口唇部に一本沈線を有し、7・26・27・29は、内面の口唇部付近に一本沈線が描かれている。地文は、26・27を除き縄文（LR）である。第14図4、第19図1は、この類に含まれる。

第15類（第21図10～16）平行沈線と刻目あるいは列点文によつて文様が描かれるものである。10～13は刻目を有し、14～16は列点文が描かれるものである。12・13は同一個体のもので、内面にも平行沈線と刻目を有す。口唇部にはB字状の突起を伴う。地文は、10・12・13が縄文（LR）、15が撲糸文（不明）である。

第16類（第21図17～22）口縁部が無文帯のものである。口縁部は、17・18・21・22が波状、19・20が平縁である。17・18は深鉢形土器、19・20は壺形土器と推定される。地文は、17・19が縄文（LR）であるが、他は部位が少なく不明である。第14図3も本類に含まれる。

第17類（第21図23・24）口縁部が無文帯で頸部に平行沈線を伴うものである。23・24とも深鉢形土器と推定される。口縁部は、23が山形、24が平縁である。内面には、いずれも一本沈線を伴い、24の口唇部には刻目が認められる。

第18類（第21図28）矢羽状に陰刻されるものである。1点のみ出土した。

第19類（第21図30～33）沈線により工字状の文様が描かれるものである。30～32は、口縁部が山形を呈し、いずれも内面には一本沈線を伴う。30・31はπ字状文、32は丁字文の合わせ目が瘤状に彫去され、33は反転する沈線が描かれている。

第20類（第22図3）壺形土器の完形品で、小型のものである。口縁部は磨消帯で、二分くた小突起を有す。頸部に一本沈線、内面の口唇部付近にも一本沈線を伴う。地文は、縄文（LR）である。

第21類（第22図1）台付土器である。台部しか出土せず器形は明らかでない。1点のみ出土した。七条の平行沈線が描かれ、Ω字状に彫去される部分を伴う。

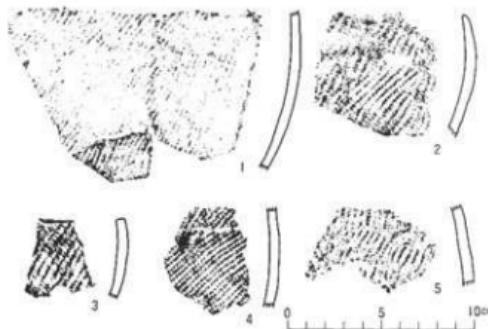
第22類（第22図2）瘤状の脚部を有す底部破片である。残存部から判断し四脚のものである。1点のみ出土した。

第23類（第22図4）注口土器の注口部である。体部との接合部付近が下方へ張り出している。

第24類（第23図1～5）地文だけのものを一括した。図示遺物はすべて深鉢形土器と推定される。



第21図 繩文土器(2)



第23図 縄文土器(4)

図番	器種	器形	出土地点	層位
1	縄文土器		BH-26	1層
2	縄文土器		IM	埋3
3	縄文土器	壺	IM	埋3
4	縄文土器	洗口土器	DADB-61, 62	埋3

第22図 縄文土器(3)

2・4は、口縁部破片で口縁部付近が内窓する。
全体地文は、いずれも縄文(L.R)である。

図番	出土地点	層位	図番	出土地点	層位
第2500 I	X-X	第21図3	1	IM	埋3
2	CP-50	3層	4	IM	埋3
3	CR-86	1層	5	IM	埋3
4	CG-84	2層	6	DM-105	3層
5	DB-83-84 IM	埋4	7	CP-110 3M	埋3
6	CS-93 IM	埋1	8	CM-110 3M	埋1
7	X-X		9	BJ-30	1層
8	CG-51	3層	10	X-X	
9	CK-84	1層	11	CT-83 IM	埋1
10	X-X		12	DC-103 3M	埋1
11	CR-107 4M	埋4	13	CM-104	2層
12	DA-DB-79-80 IM	埋1	14	CR-107 4M	埋3
13	DA-DB-81	2層	15	DO-DD-85 IM	埋3
14	X-X		16	CG-85	1層
15	CG-53	1層	17	BN-30	1層
16	BO-38	1層	18	BS-37	2層
17	X-X		19	CP-104 4M	埋1
18	CS-82 IM	埋3	20	DO-118 3M	埋3
19	ON-107 3M	埋2	21	IM	埋2
20	CO-85	2層	22	IM	埋2
21	IM	埋3	23	CR-101 4M	埋3
22	CG-53	3層	24	BN-30	1層
23	CO-108 3M	埋3	25	CP-113 3M	埋3
24	IM	埋3	26	X-X	
25	4M	埋3	27	DA-DB-81-82 IM	埋3
26	CG-54	1層	28	BJ-22	1層
27	CG-54	1層	29	BN-21	1層
28	CG-54	1層	30	BP-28	1層
29	CG-54	1層	31	CG-98	1層
30	CG-54	1層	32	CP-113 3M	埋3
31	CG-118 3M	埋3	33	DO-90	1層
32	CS-110 4M	埋3	34	第2500 I	BM-32
33	CG-87	2層	35	CP-117 3M	埋3
34	CM-101	1層	36	CG-118 3M	埋2
35	CO-118 3M	埋3	37	BS-37	1層
36	IM	埋3	38	BS-37	2層